

## 1. 帯同理由

私は学生時代、代表権を得たことはあるが、金銭と学業の関係で大会出場を何回か辞退した。また、これまで WOC の選手に関しては 10 回以上遠征先でケアしてきたが、ユニバー選手については積極的に関与してこなかった。しかしながら、今回個人的に指導やケアを続けている選手たちが代表に選ばれたことで、主としてトレーナーとして帯同することを決めた。また、大会拠点となったマグリンゲンスポーツ学校に 39 年前に 1 週間滞在したことがあり、大変興味を持っていたことも今回の帯同動機となった。

## 2. 大会エントリー

今回は伊藤樹くんが初期から帯同を決めていた。私は上記の理由があったものの、コロナの検疫(帰国後の隔離)状況の変化で決断が遅めとなった。2 人体制にはなったが、私が途中からの参入で、当初エントリーを樹くんだけに任せたことが彼にとって重荷だったと反省している。エントリーまでに必要な大きな仕事は、①在学証明書(卒業証明書)を各選手に大学から所定の書式で入手してもらい、それをデータ化すること、②エントリーに使用する写真などのデータを各選手から送信してもらうことである。伊藤くんが 6 月下旬に開催された WOC の選手でもあったため、途中で私が引き継いだ。冬季ユニバーの手続きを経験している山本賀彦さんの大きな協力を得て、主として①を行い、7 月になってから再び伊藤くんが海外から Web 上のエントリーを完了させる形になった。

これらの経過から、書類の収集は日本で個々の選手と担当者がやり取りする部分(書類の郵送)があるが、データ化後はすべてネットで行えることがわかった。よって、エントリーは帯同メンバー以外でもできると考えられる。間違いがあるとエントリーができなくなるので気を遣うこともある。私は、学連の中で担当者を配置することを提案する。

## 2. 出発前(選手団トレキャン中)～到着

蜂に刺されて発熱症状があり受診した選手の報告を受けていた。また、空気の乾燥からか、のどの痛みを訴える選手もいるとのことだった。日本で手に入る役立ちそうなものや選手から頼まれたものを購入してモデルイベント前日の深夜に到着した。

## 3. オフィシャルとしての活動

モデルイベントの朝食後から体調不良者が発生し、私は主たる対応者になった。具体的には、選手をマグリンゲンの診療所を受診させたり、イベントセンターのチーム担当

者(Salome Weber さん；かなり様々な面でお世話になりました)と対応について確認することなどである。大会期間中、競技会場でも医師などにチームの状況を問われたりした場合適宜回答したりした。そして本来の競技担当オフィシャルは樹くんが行うという大まかな分業が行われた。樹くんが選手の立場を良く理解していたお陰で、選手達は一時動揺したものの競技に集中できる状態が保たれた。一方私は、隔離された選手及びそれ以外の選手、日本の JOA・学連の理事各位とのやり取りの中で、スムーズに物事を進めることができずに、かなり力不足を感じた。日本との時差もあり、眠る時間も短くなったが体力的には持ちこたえ、選手に対してスポーツ障害や疲労だけでなく健康面全般のアドバイスがある程度できた。私だけが突出して年齢が高く、資格に基づいた経験や知識もあったからだと思う。

#### 4. 帰国時

大会終了後の出発が私が一番早く、時間外の早朝だったので、選手団とのお別れは前日の夜であった。その時点で、帰国時 PCR 検査結果が確定しておらず、複数の陽性者がいたが何人が延泊するかは把握しないまま帰国の途に就いた。7月の JWOC で、すぐに帰国できなかった選手がいたこともあり、選手団としては、航空券取り直しや延泊をカバーする海外旅行保険に加入することが強く求められていて、金銭的な問題は無いようであった。しかし、学生カードの利用上限金額の心配や、滞在場所、検査場所、航空券の取り直し方法など、実際延泊した選手たちは大きな不安を抱えていたことであろう。事前に延泊事象が生じた場合のことを想定して対応方法をできるだけは聞いておいたが、実際の対応は結構バタバタした様子である。

今後は帰国時 PCR 検査の義務は無くなるが、ワクチン接種回数の規定はある程度残ると考えられる。代表を目指す選手たちは、余裕を持った日程でのある程度積極的な接種を考えたほうが無難だと思う。

#### 5. 最後に

今回の事象は特別なことばかりであろう。次回以降にそのまま参考になることは少ないかもしれない。私が大きく感じたことは、選手 12 人にオフィシャル 2 人で目いっぱいということ。WOC と比較し、各競技の参加人数が多いこと、レスト日がないことなど、選手団として把握しなければならないことや提出期限を守らなければならないことが次々に生じる。プログラムの熟読など、競技に関することをオフィシャル任せにしないこと、直前の競技説明ミーティングにも誰か選手が出席して、見落としがないか確認を一緒にすることを日本での事前ミーティングから選手たちをお願いしていた。選手たちは平常ではない状況下で、オフィシャルに頼るのではなく、比較的自立してよく動いてくれた。

時差や距離があり、COVID-19 に対する考え方や政策が異なるスイスと日本の間で

どうしたら最大の成果を選手に出させてあげられるか、大いに悩み続けた1週間だった。全員とは言えないが、何人かの選手には大きな自信につながる結果が出せたことも事実なので、それを糧に今後のこと(オフィシャルの選定)に関して協力できることがあればしていきたい。